HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	How Original is Nishida Kitarō's Philosophy in An Inquiry into the Good? A Critical Investigation of Japan's 'First' Philosophy [an abstract of dissertation and a summary of dissertation review]
Author(s)	Stone, Richard Hammond
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(文学)
Dissertation Number	甲第14561号
Issue Date	2021-03-25
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/81226
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/
Type	doctoral thesis
File Information	Richard_Stone_review.pdf, 審査の要旨

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

学位論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（文学）　　氏名：　リチャード・ハモンド・ストーン

主査　教　授　田口　茂
審査委員　副査　准教授　近藤智彦
副査　准教授　コーカー・ケイトリン・クリスティーン
副査　准教授　張　政遠（東京大学）

学位論文題名
How Original is Nishida Kitarō's Philosophy in *An Inquiry into the Good*?
A Critical Investigation of Japan's 'First' Philosophy
（『善の研究』における西田幾多郎の哲学はどれほど独創的か？
日本「最初の」哲学をめぐる批判的研究）

・当該研究領域における本論文の研究成果

本論文は、西田幾多郎の『善の研究』が「日本で最初の独創的な哲学」であるという広く流布した言説に対し、この著作が明治の思想的潮流からの強い影響下に成立し、多くの思想的特徴をそれと共有している点を指摘しつつ、それ以後の日本哲学に対し決定的な影響を与えるエポックメイキングな成果でもあったという点を、テキストに即して実証しようとする研究である。本論文の学術的成果としては、主に以下の点が挙げられる。

第一に、具体的な事例とテキストを挙げながら、明治の思想的潮流と西田哲学との連続性と差異を際立たせた点が指摘できる。前期西田哲学と明治の哲学との間に思想的な共通点があることはすでに先行研究においても指摘されていたが、明治思想と西田哲学との連続性と差異を、「現象即実在」論、「自己実現」説、「小我と大我」の関係という三つの側面から包括的に論じたモノグラフはこれまでに存在せず、オリジナルな学術的成果であると考えられる。とりわけ、本論文が英語で書かれていることを考えると、いまだ英訳の存在しない明治期の思想家の著作を具体的に取り上げ、西田哲学との異同を検討した本論文は、国内外の日本哲学・日本思想の研究者にとって貴重な資料である。従来の西田哲学研究や日本哲学・日本思想の一般的紹介においては、西田がしばしば「日本で最初の独創的な哲学者」であると言われる。本論文は、しばしば根拠無しに自明のように行われるこうした言説に対して、批判的な眼差しを向ける。ただし、本論文は「西田は日本最初の独創的哲学者であった」か「なかった」かという形で単純な答えを出そうとするものではない。そのような抽象的で一般的な言明（ないしある種の本質主義）が飛び越している具体的な歴史的・テキスト的事実に立ち戻り、西田哲学が何らかの意味で「独創的」であるとすればそれはどのような意味においてであるか、西田哲学はそれ以前の明治の哲学とどの程度連続的で、どのような点でそこからの離脱を示しているのか、というより実質的な問いに、本論文は一定の答えを提示している。それが完全に包括的かつ最終的なものではないことは申請者も承知しているが、本論文に示された個別的・具体的考察は、先行研究に比べて西田哲学をより明確に近代日本哲学史の中に位置づけることに成功している。

第二に、『善の研究』の中に、中期・後期哲学につながる萌芽を見出し、それについての、ある意味で「現象学的」とも言いうる事象的解釈を提示している点が挙げられる。第一章では、『善の研究』において「純粋経験」が単に考察対象として記述されているだけではなく、それ自体が方法論的原理としても機能している点が指摘されている。第三章では、「統一的或る者」「統一力」などと呼ばれる、自己の根柢にある普遍的なものについて論じられているが、それが「小我と大我の神秘的合一」といった明治の哲学を特徴づける思想だけに還元されうるものではない、と本論文は指摘する。自己の根柢にある普遍的契機は、むしろある種の「関数」のようなものとして理解するこ

とができ、しかもそれは、具体的な個によって実現されることにより様々に展開されうる生きた構造であるとされる。これが後年の著作における「自覚」の根本構造へとつながっていくことを本論文は示唆している。こうした解釈は、先行研究に見られない本論文独自の成果であると考えられる。

なお、本論文第二章の一部が、査読付き国際学術雑誌である *The European Journal of Japanese Philosophy* (2018)に掲載されている。これは日本哲学関連の主要な国際学術誌であり、申請者の研究が関連学会において一定の評価を得ていることが示されている。

審査委員会では、近代以前の空海・道元などの思想家をどのように捉えるか、近代以後の「哲学」概念における「西洋性」の問題をどのように捉えるか、といった重要な問題が本論文では十分に答えられていない点が指摘されたが、いずれもきわめて大きな問題であり、限られた紙数の中ですべての問題を扱うことができず、問題設定を限定したということは理解できる。また、扱う哲学者の選定の基準についても疑問が出されたが、論文としてのまとまりのために対象を限定することはやむをえなかったと考えられる。いずれも、本論文の学術論文としての価値を本質的に損なう問題ではないと本委員会では判断した。

・学位授与に関する委員会の所見

以上の審査結果に基づき、本審査委員会は、全員一致して学位申請者に博士（文学）の学位を授与することが適当であるとの結論に達した。